

バードの越えた峠道

神村ふじを

山形市のイザベラ・バード研究者、渋谷光夫先生は今年1月、バードに関する2冊目の著書『山形のまちとイザベラ・バード』を出版された。

書評が山形新聞にも掲載され、「歴史的背景やバードの人物観、紀行文それ自体の分析をまるごと対象化し、山形―日本―英国を貫く同時代の在りようを深掘りしていく。その作業はまるで『バード・山形百科事典』を編さんしているようだ」と絶賛された。

この本の特徴は、およそ研究書には似つかわしくないような「んだんだ情報」などというトピックスを随所に織り込み、例えばバードの名前を冠したワインを取り上げて、山形の「ん（う）まいもの」として紹介したりしている。溢れんばかりのデータ、内容なので、これが研究書の著休めとなっていてとてもいい。実は先生とは昔同じ職場で仕事をさせてもらった間柄であり、先生の個性、性格を知っている者としては、さもありなん、彼らしさ溢れる好著になった。

ここでイザベラ・バードについて記しておこう。バードは19世紀イギリスの旅行家、探検家、紀行作家で、本名をイザベラ・ルーシー・バードと言ひ、江戸末期の1831年（天保2）、イギリスのヨークシャー州で牧師の娘として生まれた。

彼女は、幼少時大変病弱で、時には北米まで転地療養していたと言ふ。そのことがきっかけとなって、長じて旅に憧れるようになったと言ふ。

安政年間にアメリカ、カナダへ旅行。日本へは明治になってから、1878年（明治11）の6月から9月にかけて、東京から日光、新潟、山形に入り、日本海側から北海道に至る大旅行をしている。

バードはこの旅行を紀行文にまとめ、日本では「日本奥地紀行」と題して出版されており、当時の街道筋の宿場や貧しい山村の様子を克明に記録している。

バードは新潟から山形に抜ける際、越後米沢街道の難所十三峠を通った。この街道は急峻な山々に囲まれ、人馬が越すには困難を極めた。だが、置賜地方に塩や海産物を運ぶ重要なルートであったため、木や石を積み上げ、木道、敷石道として整備が図られていた。

その中の難所のひとつ黒沢峠は、新潟県境の大里峠おかりから数えて5つめの峠で、標高こそ400メートルそこそこだが、急峻な悪路の山道が続き、丁寧ていねいに石が敷き詰められていた。

バードが峠を越えたのは7月12日、美しい山毛櫨の緑も深みを増してきた頃だったと思うが、黒

沢には泊まれる宿がなかったことから、降雨と暗がりの中を市野々まで進んでいる。「きのう旅した道のりは12時間かかって18マイル(約28・8キロ)」と、旅路の過酷さを記している。

この黒沢峠を含む十三峠は、バードが旅した6年後に、鬼県令として知られる三島通庸が小国新道(現国道113号線)を開削したため、その役目を終えて、百年近くの間森の中に深く埋もれることになった。

1980年(昭和55)、小国町黒沢地区の住民を中心に、「黒沢峠敷石道保存会」が設立され、道筋と埋もれていた敷石を見事掘り出すことに成功したのである。

私が訪れた5月中旬の黒沢峠は、当時の苦勞を思い起こさせるかのように、鬱蒼とした森の中に敷石道が見え隠れし、この急峻な山道をようよう抜けてこそ、置賜盆地を彼女をして「東洋のアルカディアを見た」と言わしめたことになったのではなからうか。連日の雨が上がり、峠を越えた晴れやかな心情が伝わってくるようである。

深緑や碧眼乗せし牛の背 ふじを

参考資料：渋谷光夫『山形のまちとイザベラ・バード』(霞城出版、2023年)

渋谷光夫『イザベラ・バードの山形路』(無明舎出版、2011年)

イザベラ・バード著、高梨健吉訳『日本奥地紀行』(平凡社、1973年)

山形新聞2023年(令和5)5月10日付「味読 郷土の本」の書評から

